

# 文化高知

2002年11月 NO.110



「シネシネさん」 ヨコタアキラ

## 〈もくじ〉

ベストを尽くす日	西地幸仁	2
良婆の里・高知	高橋信裕	3
ドイツの楽しみ——「クリスマス」編	塩見由利	4～5
絵手紙、それは心の贈り物	成沢悦子	6～7
IT社会の新しいコミュニティについて③	川村晶子	8～9
トライアスロンに魅せられて	徳弘辰彦	10～11
ぼくが父親になったとき	佐藤伸治	12
地域社会の再生と地方自治②	根小田渡	13
風俗歳時記・風伯		14～15

# ベストを尽くす日— 高知西武からのご挨拶

西地幸仁

「ベストを尽くす日、あと49日」

この記事が読者の皆様へ届く予定の十一月一日、高知西武の社員出入口に九月から設置されている残暦板には、設置初日100日であった日数が、こう表示されている。

「高知西武が消える」といった感傷的な後ろ向き姿勢で設置したわけではない。あの発表以来、たくさんのお客様にいただいた惜しむ声や激励の言葉に、「最後までベストを尽くそう」と、全員が奮い立って実行している接客心得の道標であります。

言い尽くせない、最終章でのお礼

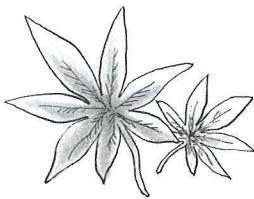
実際、報道後のお客様のお言葉は、各売場の社員の気持ちを、感謝と感激で熱くしました。ありがたいことに、感極まって、店頭で社員と一緒に

二十一世紀は、すべてのビジネスが人間サービスになる

そう自覚して、過去から幾度となく、「サービス向上だ」、「CS運動だ」、「おもてなしだ」と社員を鼓舞してきましたが、この度は、社員全員が自ら「最後までベストのサービスを尽くす」と言い出しました。

販売のプロはよりプロらしくお客様をサポートし、経験未達の新規入店者は、稚拙でも真心を込めてお客様笑顔のために行動しようという決意しました。

間もなく、閉店クリアランスセールがはじまりますが、たくさんのお客様をお迎えし、どんなに忙しくなるうが、社員それぞれがそのベスト



のサービスを發揮してくれると確信しています。それがまた、土電会館・とでん西武・高知西武と変遷しつつ、四十四年間ご愛顧いただいた

お客様への心からの感謝の証になると、肝に銘じてそれからの毎日を送っております。

脱皮しない蛇は死ぬ

どんな逆境にあっても負けず、むしろバネにして人生に向かおうと言ってきました。培ってきた販売力・サービス力が自らを支えると。時代が「チェンジ・オア・ダイ」と叫んで久しいですが、ほとんどの社員の再就職の希望が地元志向で、その前途も険しいだけに、今こそ前向きで、強い自分に脱皮すべきと言ってきました。

健気にも辛さを乗り越え、お客様に接している社員とともに、最後までベストを尽くします。

長年の御礼ということで筆を執りましたが、手前勝手な社員応援歌調になってしまいました。直接お客様に接する社員の気持ち、お客様を満足させると考えておりますので、お許しただければ幸いです。

四十四年間、支え続けていただいたお客様、地元の方々、高知西武ゆかりの皆様に、月並みでございますが、心からお礼申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

にしぢゆきひと／西武百貨店高知店店長

## 良婆の里・高知

高橋信裕



私の小学時代の修学旅行先は、「高知」だった。高知県のなかでも西の果ての「宿毛」で生まれた私にとって、当時の高知は遠く、またそれだけに拓けた、憧れの都会のように思われた。県交通バスが県土を縦横に走っていた時代で、高知までは、宿毛から窪川までバス便を利用し、窪川から国鉄に乗り換えて行った。昭和三十五年（一九六〇）頃の話である。

田舎の商店の次男に生まれた私を「将来は外に出ち、自分で家を持たんといかんがやけん、ええ学校に行けるようにしちもらわんといかん」という「祖母」や「曾祖母」の考えが父を動かし、中学校から高知に出された。その頃の私の家族は七人で、両親に我々三人の兄弟、それに祖母と曾祖母が同居していた。曾祖母は、明治十三年生まれの後添えで、明治三十三年生まれの祖母は先妻の実娘という関係にあったが、大きくなる

まで、私はこの関係には気づかなかった。祖母の実母は自由民権家であり、また早稲田大学建学の母といわれている小野梓の実妹、鍊である。祖母は末子という名であったから、鍊は七人目にあたるこの娘を最後に子どもはつくらないと思っただけであらう。だが、実際には彼女の死後、後妻のもとに二人の娘が生まれ、祖母は末子ではなくなってしまった。家は、兄二人が早世していたことから、末子が家を継いだ。姉や妹たちはみな他家に嫁ぎ、残された自分が家の正統性を受け継ぐ、という気負いや自負がそうさせたのか、祖母の性格は人一倍気丈で、几帳面であった。知人や親類には手紙をこまめに書いては、消息を確かめ合うことを日常としていた。小野梓の実娘、安お婆さんからの手紙も残されている。私の実社会への旅立ちには、小さいときから「人の飯を食わんといかん」、「苦勞は買つてもせんといかん」、

あるいは「後継ぎ以外の次男、三男は、学歴をつけんといかん」という古き良き？コンセプトから、中学入学を契機に高知から始まったわけだが、子どもであり、しかも内気で人見知りの激しかった当時の私にとって、言葉や文化、しきたり等が違いう高知での生活は、不安がつきまとい、寂しかった。こうした当時の自分に優しく接し、親身になってお世話してくださった人々を、東京に生活の本拠を移して三十五、六年経った今、懐かしく思い出す。そしてまた、そうした人々の多くが、私の祖母や曾祖母のような女性であったことも、いっそう高知を懐かしいものとしている。なかでも伴のお婆さんの温かさは忘れることのできない思い出として残っている。

お婆さんは、伴美智子といい、当時すでに八十歳に近い年齢であった。西町に住まわれ、夫は少し耳が不自由だったが、矍鑠とした老爺で自分のことを「僕は……」と、ボクと称して話された。それがとても、ハイカラに思われた。私はその伴家の裏の一室を間借りして学校に通った。お二人は西式という健康法を採用し、堅い板を床代わりしていたこともあって、腰もすつと伸びていた。子息が外務省に勤められており、

子息がサンフランシスコ勤務になって遠く離れた時期には、会いたくないと桂浜に行き、海の彼方のアメリカ西海岸に向けて大声で息子の名を呼んだということなども、夕食のときなどに聞かされた。美智子お婆さんには、私の存在がその息子さんと重なった部分があったのか、とても優しく、時には厳しく育てていた。この伴家で私は「高知」を故郷とすることができたように思う。「人は感謝ということを忘れてはいけない」、「感謝、感謝」という言葉が口癖であった。その教えどおりに生きているのか、今の私は心もとないけれども、美智子お婆さん、どうもありがとう。

私にとって、「高知」は、龍馬とともに良婆が思い出される故郷である。

たかはしのおひろ／文化環境研究  
究所所長・日本ミュージアム・  
マネージメント学会事務局長



# ドイツの楽しみ —「クリスマス」編



塩見由利

ドイツの冬は暗く寒い。大陸性の寒さは帽子なしでは頭皮が凍りそうなのだ。灰色の雲が低く垂れ、午後は四時くらいから暗くなり始めてくる。けれどその季節を、ドイツやオーストリアの人々はもともと美しい季節に変える。

クリスマス前の四つの日曜日を含む期間を、アドベント(待降節)という。各家庭はアドベントクラウンツという、もみの木などの枝で作ったリースを水平につるすかテーブルに置かして、四つのろうそくを立てる。本来ヨーロッパの冬至の祭りであるクリスマスは、太陽の力の衰えたこの時期に祈りを捧げ、もう一度太陽に戻ってきてもらうための祭りで、「光」や「ろうそく」はとても大きな意味がある。

しかしアドベントのもっとも大きな楽しみは、なんといってもクリスマスの市(ヴァイナハツマルクト)であろう。

町の広場に所狭しと屋台(スタンド)が立ち並び、小さな村のようになる。大きなツリーもマルクトの真ん中に立ち、いよいよ公認のクリスマスシーズンの到来である。

可愛らしく飾られた屋台で売られているのは、クリスマスに欠かせないものばかりである。ツリーや窓辺



の飾り、リースやクリスマスツリーの型もある。燃やしていい香りをする蜂蜜ろうのろうそくを売る屋台は、ヨーロッパ伝統のわらで作った丸い巣かごを飾っている。

山岳地帯で山男たちが冬の間の手すぎびに作ったのが始まりの木彫りの人形は、今や世界中で愛されているが、その素材で飽きのこない造形は、今でもプレイモビルなどのおもちゃに受け継がれていると思うのは私だけだろうか。

どの屋台も、暗くなればなるほど、暖かい明かりで美しく浮かび上がり、絵本の世界に入ってしまったようである。ニュルンベルクやドレスデンのような大きな町の大きなクリスマス



▶ドイツのクリスマスケーキ「シュトレン」(写真中央)

スの市が有名だが、小さな町の市もなかなか味わいがある。

クリスマスにはまた、その季節の味もある。硬めのクッキー「スペクラチウス」は、サンタや天使や動物などの形になっていてかわいい。その木型は、それ自体でなかなかいいインテリアになりそうだ。

飲み物は赤ワインにクロアチアやオランダの皮など入れて温めたホットワイン、「グリュウワイン」。そしてドイツのクリスマスケーキといえば「シュトレン」から始まったという「シュトレン」から始まったという「シュトレン」。ドライフルーツやナッツなどの入った、ずしりと密で日持ちのする焼き菓子である。焼きたてよりも少し日をおいた方が熟成して



お祭りのお菓子「レープクーヘン」

おいしいと言う。他に、お祭りといえれば必ずでてくるレープクーヘン(蜂蜜堅パン)でも言うか。表に砂糖で色とりどりの字や模様が描いてある)や焼きアーモンドが甘い匂いを漂わせる。この匂いだけですでにうきうきしてしまう。

また、各家庭は趣向を凝らし窓辺や玄関を彩る。子どもたちも冬の夜長を工作で楽しむ。紙やわらで星、天使、ツリーなどを単純ながら実に洗練された形で作り上げる。常日頃は色彩感覚はフランス人に譲り、造形力はイタリア人に取り残されたようなドイツ系民族であるが、なんのなんの、見直してしまう。

ドイツではサンタクロースは基本的にいない。あれはアメリカのものである。しかしアメリカナイズされた現代、サンタらしきものがないたりするのだが、それでも多少違う。

まず、ドイツではそれは聖ニコラウスである。そして、みにくい恐ろしい家来ループレヒトをつけていて、悪い子がいると枝でむち打ったり袋に入れて連れ去って行った(秋田のなまはげのよう)。そして、ややこしいことに、聖ニコラ

ウスの日は十二月六日である。この日にもサンタらしき「ヴァイナハツマン(クリスマス男)」が現れてプレゼントを配ったりする。

アドベントの期間中、日曜ごとに特別な集会をしていた教会も、クリスマス当日二十五日にはとりわけ大きな集会を開く。日頃教会に行くのを怠っている人も、この日ばかりは、ということも多い。

町は静まり、教会に集まる人々の姿と教会の鐘の音のみ。日本ではクリスマスは友人や恋人と一緒に楽しく過ごすというイメージがあるが、

ヨーロッパでは厳然と「家族のイベント」である。逆に、お正月は友人たちと馬鹿騒ぎなので、このあたりは日本と逆だ。この日、町は神への感謝と静かな幸福感に包まれる。さてクリスマスが過ぎて、クリスマスの市こそなくなるが、ツリーや家々の飾りがあわてて撤去されることはない。まだまだ春まで長いのだ。暗くなる夕方にはしばらくは美しい明かりを楽しめる。二月二日のマリア清めの祝日まで飾っていいとされている(まさに立春前までドイツでもこの日から春が始まるとさ

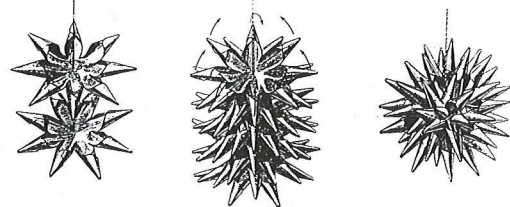
## WEIHNACHTSSTERNE



Dieser Stern kann aus Farbfolie oder aus Seidenpapier angefertigt werden. Zehn Kreise ausschneiden, jeden nach dem obenstehenden Muster unterteilen und mit der Schere schneiden.

Segmente um den Bleistift wickeln und zu Spitzen drehen. Die Farbfolien halten von selbst; beim Seidenpapier Spizzen mit etwas Leim fixieren. In jede Kreismitte ein Loch stechen.

Das Ende eines Bandes oder dicken Fadens kneten, die Sterne auffädeln und die Spizzen ballförmig anordnen. Notfalls zusätzliche Kreise anfertigen, bis der Ball schön rund ist.



冬の窓辺を飾る細工。様々な種類がある

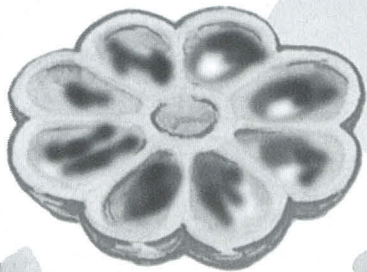
れるのだ)。つらく厳しい冬を乗り切る古人の知恵をしみじみと感じる。ところで、「きよしこの夜」はオーストリアの片田舎で作られたドイツ語の歌だったということをご存じだろうか。また、「もみの木」も、ドイツの民謡だった。これは替え歌が作りやすいので(みなさんもおためしあれ)いろんな歌詞で歌われていたものだった。元の「もみの木の歌詞も、「もみの木よ、いつも変わらず緑であることよ」から、二番は「それにひきかえ娘っこ、おまえのなんとさまぐれなこと」と続くものだったのが、後に今日知られている二番・三番が作られ、クリスマスソングの定番となったそうだ。

クリスマスツリーは古代ゲルマン人の樹木信仰に起源を持ち、常緑樹に生け贄などを捧げた名残だと言われるが(それがツリーに玉などつるす形で残っている)、もみの木に限らない。似ているが幹や枝の色の違う、ドイツトウヒも好んで使われる。他にも針葉常緑樹なら何でもOK。歌が有名になり、まるでクリスマスツリーはもみの木が正式という誤解があるが、特にそういうわけはないのだ。

(しおみゆり/高知高専・高知女子大学非常勤講師)

# 絵手紙、それは心の贈り物

成沢悦子



「個性があつてそれぞれにえいねえ」「こんなのがポストにはいつていたら嬉しいでしょうねえ」「私にもかけるろうか」

絵手紙をみて下さった方々の声。即座に私は答えます。「ええ、かけますとも、どなたにも」と。

この一年間に、県内の仲間であつた約二千枚を展示した絵手紙交流



かるぽーとでは二千枚の絵手紙が展示された

展、「第六回南国土佐からの発信」。かるぽーとの市民ギャラリーには、六日間の期間中に千五百人を超える方々が足を運んで下さいました。

絵手紙という言葉は、創始者である小池邦夫先生（現日本絵手紙協会会長）の造語です。今から約四十年前に、大学の書道科に在学中の一人の若者（小池先生）が、親しい友人

日々の想いをはがきにたたくつづけるように書いて送り続けたのが絵手紙のはじまり。その生い立ちを考える時、展覧会で賞を競うような事とは関係なく、ひとりに宛てて心を裸にし、素直な自分を表現していけばよいということがわかります。絵手紙は「絵のはいつた

手紙」です。合言葉は「ヘタでいい、ヘタがいい」。全力を出してかいたものは、形が歪んでも、線が震えても、いや歪みや震えがあればこそ、それをかいた方の必死さが伝わって、受け取った方の心を揺さぶるのだと思ひます。小手先で器用にかくのではなく、心込めて一生懸命。ドキドキとした気持ちの昂り、燃える想い、時にはどうしようもない淋しさ等々、自分らしさを出して、ヘタでも堂々とかく。絵はかけないと思ひ込んでいた方が、その人らしさの出た絵手紙をかけた時、もう一人の自分を発見した喜びを感じられるのではないのでしょうか。ほんの少しの勇気があれば、小さなはがきは大きな心のプレゼントになることでしょう。

先二、三本に全神経を集中して、ゆつくりゆつくり線を引き。線がかければ絵も字もかける（お子さんや、体に無理がかかる方は、できる範囲で）。

① 絵手紙は手紙。ひとりの方へ心込めて。あなたの手紙を喜んでくれる、いい受け手（キヤッチャー）がある。いい受け手（キヤッチャー）が

② 下書きなしのぶつつけ本番、形の上手さ求めずに。人まねではない、素の自分流。

③ 本物とじっくりにらめっこ。自然は最高のお手本。物の生命をかき写すつもりで。

④ 大きく伸び伸びと。はがきからはみ出す程に。モチーフをよくみて、かき始めを大きくかくと、全体も二倍、三倍に。受け取った方も元氣百倍。

⑤ 絵手紙は線が命。墨で輪郭線をかき。鉛筆やクレヨン等、筆記用具は何でもよいが、筆は心の中を演奏する楽器と言われる程に、瞬間の気持ちにあらわす最高の道具。にじみ、かすれ、太さ、細さ等表情たっぷり。あえて筆の先端を軽く持つて、うま

くかこうという意識を除き、筆の穂



自由民権運動発祥の地である土佐、自由を求める気風の強い高知での絵手紙の広がりは必然であったと思ひます。まだまだ数は少ないものの、絵手紙に恋をしましたとおっしゃる男性もいて、嬉しい限りです。県内の最高齢は百一歳の方。何のてら

⑥ 色塗りは、穂先の短い彩色筆で、手早くタツタツと。少しくらいの塗り残しはあつた方がよい。

⑦ 読みやすい字で文をいれる。絵にかからないように、自分の言葉で飾らずに。

⑧ かいいたら必ずポストイン、等々。

百年を生きてこれらた重みを感じます。

今では、全国に、いや、世界中に、何百万人もの絵手紙愛好者がいます。ファックスやEメール、電話のような速さはないけれど、じつじつと心を伝えるあつ

たかさは、絵手紙ならではのものです。小さな子からお年寄りまで、誰もが筆をとり一生懸命使りをかく。そこには現代に忘れ去られようとしてい

と受け継がれていくことと思ひます。長くかき続けていくために、「いいもの」をたくさんみて自分の眼を養い、年とともに薄れていく感動する心を失わず、感性を磨いていこう。いつまでも、子どものように純な心で、時には「無」になれることを願つて。

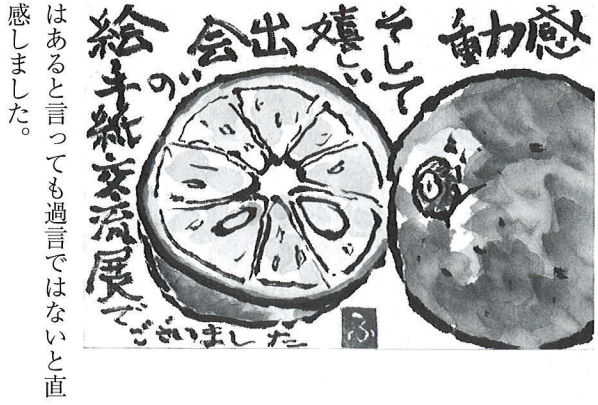


たかさは、絵手紙ならではのものです。小さな子からお年寄りまで、誰もが筆をとり一生懸命使りをかく。そこには現代に忘れ去られようとしてい

と受け継がれていくことと思ひます。長くかき続けていくために、「いいもの」をたくさんみて自分の眼を養い、年とともに薄れていく感動する心を失わず、感性を磨いていこう。いつまでも、子どものように純な心で、時には「無」になれることを願つて。

なるさわえつこ／日本絵手紙協会公認講師・絵手紙南国土佐の会代表

なるさわえつこ／日本絵手紙協会公認講師・絵手紙南国土佐の会代表



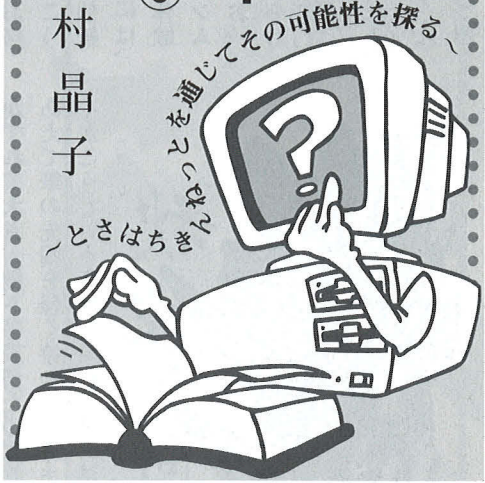
はあると言つても過言ではないと直感しました。

まずは、絵手紙を知っていたかどうか、それまでに交流した三百枚の絵手紙を南国郵便局のロビーをお借りして展示。体験もしていただくことと筆、青墨、顔彩（絵具）や画仙紙はがき等を並べました。初日には、新聞社やテレビの取材を受け、体験したい方々が列をなし、熱気ムンムン。私もピンピン感じながら、お一人お一人に「絵手紙とは……」をお伝えしていったのです。

① 絵手紙は手紙。ひとりの方へ心込めて。あなたの手紙を喜んでくれる、いい受け手（キヤッチャー）がある。いい受け手（キヤッチャー）が

# IT社会の 新しい コミュニティ について③

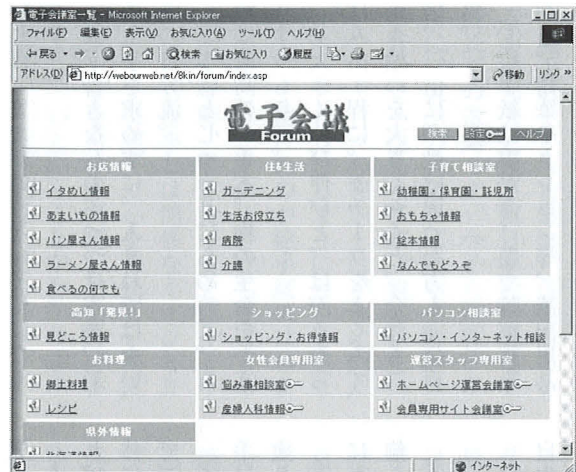
川村 晶子



前回は、「とさはちきんねっと」でメールや掲示板を使って、コミュニティを図っているというお話をしましたが、「とさはちきんねっと」のホームページには、会員登録を行って、ネット管理者からIDとパスワードを発行してもらわないと使えない機能があります。

それは電子会議室。使い方は掲示板と似ているのですが、ある発言に対し、返事や意見を入力すると、その一連のやりとりがツリー型に表示される機能です。各々のグループがオフ会(注1)などを開催する際、日程や場所などの調整をするために利用したりしています。誰でも見ることでできる掲示板でこういったやりとりを行うと、個人情報特定され

る恐れがありますので、ID・パスワードで承認されたメンバーだけが



入れる場所に会議室を設けているのです。

『とさはちきんねっと』では、電子会議室の使い方は、それぞれグループの自主性に任せておりますが、最近では、こういった電子会議室を使って、住民の意見を積極的に政策に取り入れようとする自治体が増えてきています。

例えば、神奈川県大和市 (<http://www.city.yamato.kanagawa.jp/>) は、二〇〇〇年一月一日より、電子情報交流システム「どこでもコミュニティ」の運用を始めました。こちらの電子会議室は、市民が交流する場として、また行政が市民の意見を反映しながら政策を策定することを目的として運用されています。

大和市の会議室も、『とさはちきんねっと』と同様、利用者登録を行いID・パスワードをもらわないと利用できませんが、大和市の住民以外でも参加できます。

また、同じ神奈川県横須賀市では、市民がインターネット上で議論を行い、その成果を市の施策に反映させる仕組みとして「まちづくり電子

フォーラム」(<http://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/forum/index.html>) を開設しています。

これまでも、各自治体では市民の意見を取り入れようとする様々な取り組みがなされてきましたが、市民側には、時間的な制約があったり、家庭や身体上の理由で外に出て行くことが難しい人も多く、その大多数の声は政策に届かなかったことは否めません。

自治体が電子会議室を導入するにあたっては、活発な議論を促すための運営側のノウハウが必要ですし、討論した事がどのように政策に生かされ、市民の生活を変えていっているのかという成果が明らかにされなければ意味がないのですが、昨今のインターネット人口の増加を背景に、今後、すべての市民がより公平に、かつリアルタイムに、時間や空間を超えて議論に参加できる可能性を秘めています。

しかし、私も『とさはちきんねっと』を運営していて感じることは、高知に暮らす人々が自分たちの生活を変えていくには、もっと個々が能動的にコミュニティへと参加し、進めなければならないという自立した精神が必要だということです。そし

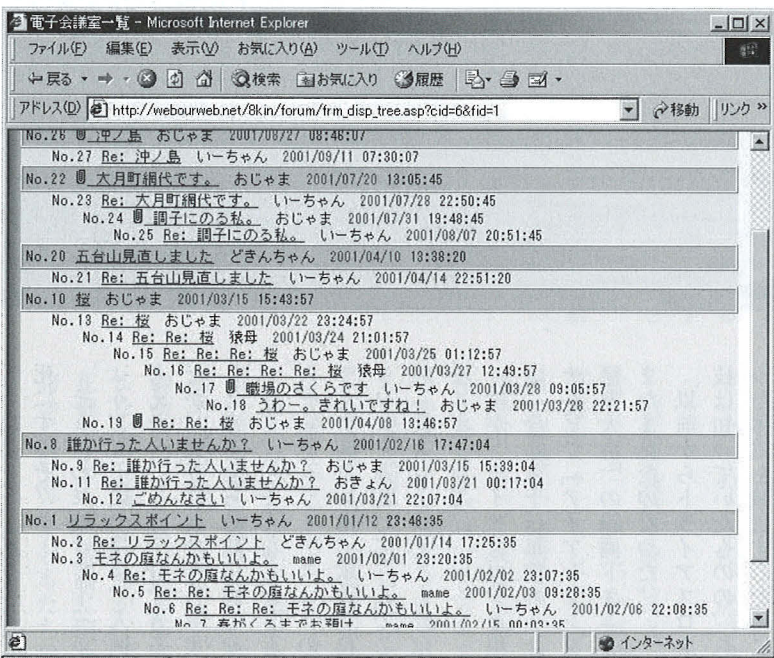
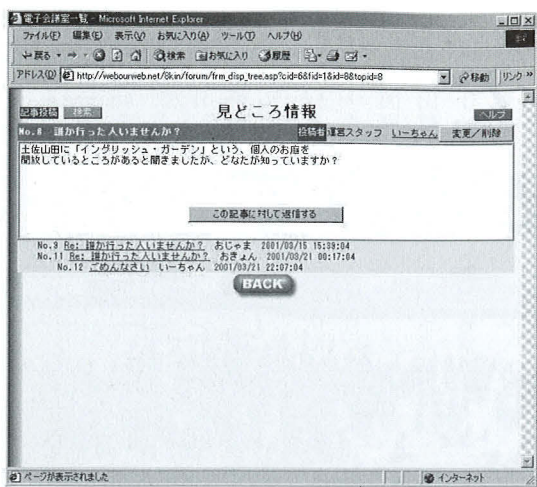
て、コミュニティがうまく活性化していくためには、「自分さえ良ければいい」のではなく、大きな視点で全体を捉え、コミュニケーション(他人の意見に迎合することはコミュニケーションとは言いません)を円滑に図る姿勢が大切です。自立した個人同士の協調がないと何も生まれません。

ある県外の知人に「高知の人は、議論好きだと言うが、他人の話は聞いていない。得手勝手な自己主張だ」と言われたことがあります。ムツとしながらも、私自身そう認めざるを

得ない土佐人の気質を感じてもいいです。確かに、他とは違う自分ということを確認することは、とても重要なことですが、そこから他人を認め、すり合わせていくという行為がなされなければ、自分の成長も、そして地域コミュニティの成長もありえないのです。

「高知の人は、議論も好きだが、多方面からの意見を取り入れて、なかなか良いものを創り上げる。」

『とさはちきんねっと』では、ICT(注2)を利用したコミュニティの活動を通じて、そう言ってもらえるような人づくり、地域づくりを目指していきたいと思っております。



『とさはちきんねっと』の電子会議室。発言者のやりとりがツリー型に表示される

### 用語説明

注1 オフ会 ネット上でやりとりしている者同士が、実際に集まって会うこと。

注2 ICT (Information, Communication and Technology) 情報教育の世界では、単に機器やソフトウェアの操作ができる人材を育てるのではなく、多量の情報の中から必要な情報を取り出し活用しながら、ネットワーク上で共同作業ができる人材を育てる事が重要視され始めている。

「IT(情報技術)は情報を得る手段」「ICT(情報)コミュニケーション(技術)」は、情報を処理する知恵、とも言われる。

とさはちきんねっとURL:  
<http://www.inforoma.or.jp/tosask/index.html>

かわむらあきこ／富士通株式会社  
社高知支店勤務・『とさはちきんねっと』総括

# トライアスロンに 魅せられて



徳弘辰彦

「そんなことばかりしよったら、早死にするぞ!!」

そう言われ続けて十三年。今年ちょうど五十歳の僕は、人間五十年と考えたら、もう十分すぎるほど十分だが、長寿社会の今日、まだ折り返しと考えたら結論に達しない。

さて、「そんなこと」とは、知る人ぞ知るトライアスロンのこと。トライアスロンは、水泳、自転車、マラソンを連続して一人でこなす、別名「鉄人レース」とも呼ばれる過酷なスポーツだ。

僕がトライアスロンと出会ったのは、今から十三年前の一九八九年秋。テレビで「アイアンマンジャパン琵琶湖大会」の録画ドキュメントをたまたま見たのだった。

以前からトライアスロンという競技は知っていたものの、八十キロあった体重を減量するために始めたジョギングと、その延長線上にあった一市民ランナーの僕から見れば、一部の馬鹿な連中が変わったことをやっている…。その頃はその程度の認識でしかなかった。

その日も暇にまかせてテレビ観戦をしていた。番組が終わりに近づき、次々とフィニッシュゲートを潜ってゴールする選手たちが、爽やかな笑顔で完走インタビューを受けている

中で、キャピキャピ言っただけの可愛い女の子二人が、何と僕と同業の若い婦警さんだったことに大きなショックを受けた。

「こんな小娘にできて、俺にできないはずがない!!」

そう一念発起したのが、馬鹿な連中の仲間入りをした理由だった。

毎年七月、鳥取県米子市周辺で開催される「全日本トライアスロン皆生大会」には、今年で六回目の出場になる。今年のレースはと言うと、例に漏れず「今年の皆生も暑かった!!」の一言。

毎年梅雨が明けたばかりのこの時期、まだ暑さに身体が慣れていないまま、最高気温は去年の三六・七度ほどではなかったものの、今年も三三・八度の皆生名物「灼熱地獄」の大会だった。こんな炎天下に、水泳三キロ、自転車一四〇キロ、マラソン四二・一九五キロを連続して競技する連中は、はっきり言って小泉総理以上の変人も知れない。

職場で皆生に行くと言ったら、レースに出場することを知らない僕には、「皆生に家族旅行でもないろう」とニヤニヤしながら下種の勘ぐりをされる始末。

それでも気を取り直して、スター

ト地点の皆生海岸に立てば、雲ひとつない青空と日本海の淡いマリブルーが無限に広がり、それまでの迷いや不安を払拭してくれた。

第一競技の水泳は、七百人同時スタートの大バトルに巻き込まれ、午前十時スタートから一時間以上を要してのフィニッシュ。去年に比べて大幅なタイムロスだったが、十二時間近くかかるロングのレースではさほど気にならない。それより、真つ青な天上でギラギラと灼熱の熱波を放出している真夏の太陽が、空き地を占領したガキ大将のように太い顔でのさばっている。時間と距離と、もうひとつの敵、この真夏の太陽との戦いも始まろうとしていた。

第二競技の自転車は、ジェットコースターと異名を持つ、伯耆富士と大山山麓のアップダウンを利用した、全国屈指の山岳コース。この後、四二・一九五キロのフルマラソンが待っている。何とか脚の筋肉を温存しておこうと思っても、脚の力を抜けば坂が登れない。坂が登れなければ帰ってこられない。

なかでも最大の難所は、ひたすら三十分以上も登り続けなくてはいけない、最大傾斜角度一〇パーセント以上の大山道路。周りの連中も必死でペダルを漕いでいる。中には、サ



第二競技の自転車。灼熱の太陽が照りつける

ドルから腰を浮かして、ダンシングという立ち漕ぎで登っている者もいる。ハンドルに取り付けたサイクルコンピュータの速度計に目をやると、時速表示が一桁になっている。これでは歩いているのと同じだ。

僕は、大きな溜息をひとつ落とし、ふと目を元に戻すと、雄大な大山の山容をバックに、観光牧場の体験乗馬らしい一団が、蹄の音も軽やかに、反対側の車線を下ってくるのではないか。その優雅な姿は、使えるギアを全部使って必死の形相でペダルを漕ぎ続ける僕とは大違いで、さすがの僕もこれには気が抜けた。

窓を閉め切って排気ガスをまき散らしながら登ってゆく乗用車には、

むき出しの鬨志が湧いてきて、それがむしろ力にこそなっていたのが、優雅なお馬さんの列には、戦意が湧くどころか、汗もつれの自分が惨めにさえ思えて気持ちが悪くなった。

「嗚呼、馬鹿馬鹿しい!!」

馬を相手に馬鹿馬鹿しいとは洒落にもならない。せつかく「頑張ってく」と言っておいて、優しく手を振ってくれている馬上の連中から、僕はわざとに目を逸らせ、こそこそ逃げ回ると子ネズミのように、尻で彼らを見送った。

自転車競技を終えると、午後二時近くになっていた。午前十時に水泳競技をスタートしてから七時間近い時が経過し、疲労はすでにピークに達していた。これから四二・一九五キロのフルマラソンである。太陽は今を盛りにギラギラと燃え滾っている。国道四三一号に立つと、マラソン折り返し地点の境港市は、遙か遠くに霞んでいた。

皆生温泉のホテル街を抜け、米子市の市街地を離れると、右手に弓ヶ浜半島の美しい海岸線が広がった。砂浜の所々には、海水浴客のカラフルなビーチパラソルが、向日葵のお花畑のように、太陽に向かって咲き誇っている。子どもたちの歓声も聞こえている。沖の方には、真つ白い

帆を広げたヨットも浮かんでいる。すぐそこには天国があった。

いっこうにペースの上がない僕は、ほとんど意識朦朧のまま、時々聞こえてくる自動車のクラクションと、海岸線の松林で必死に泡沫を貪る蟬時雨に後押しされるように、ただひたすら左右の脚を前に送っていた。

その時、後ろから「もしかして…:」と言う声が出て、去年、折り返し手前から三十キロくらい話をしながら一緒に走った、岐阜県から来たという可愛い女子選手と偶然再会を果たした。僕のことを覚えてくれていたと聞いて、感激の涙・涙・涙・砂漠にオアシスとはこのことで、これで完全復活!!

ゴールした別れ際の約束どおり、翌日の閉会式でも再会することができて、レース中にナンパする余裕のある自分を自分で褒めてしまった。

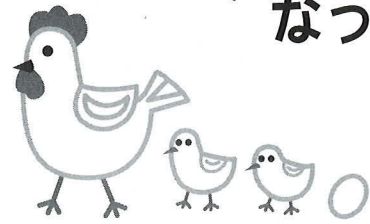
ただ、今年、恰好い旦那と、彼女以上に可愛い娘さんが一緒だったのがちよつとショック。

でも、こんな出会いでもない、こんな馬鹿馬鹿しいことはやってられないわけで、年も考えず、日々トレーニングに励んでいる。

とくひろたつひこ／走る詩人警官

陣痛の間隔が狭まって、産婦人科に入ったのが午後十時すぎ。あとは手際よく分娩台上がって、奥さんの横で元気づければ立ち会い出産完了かな……、といった予想はことごとく外れ、延々と、陣痛促進剤を打たれながら苦しむ彼女の腰を押しつ

## 親がぼくになつたとき…



つ、そのまま朝を迎えることになつてしまった。

朝七時、やっとの思いで分娩室へ。この頃になると、彼女は自分の力で立ち上がることすらできず、車いすに乗せられて移動することに。ここまで消耗したのにもかかわらず、

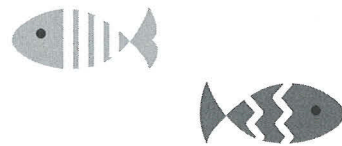
（今からさらに大変なことが待っているかもしれないけれど）ゴールが見えてきたことで彼女自身、いくぶん気持ちを持ち直せたかもしれない。かく言う自分は不謹慎ながら、苦しむ彼女をただ見ているだけという逃げ出したくなるような夜から解放されたことに、心底ホッとしていたのが正直なところだった。

消毒をし、帽子と白衣を着せられ、マスクをつけて、いざ分娩室へ。この時自分は結構なカゼのため、マスクが鼻水でベトベトになるような有り様で、こんな状態で分娩室へ入ってもよいものなのかと看護婦さんに尋ねたところ、生まれてくる赤ちゃんの免疫の強さは相当なものなので全然平気だとのこと。その程度の知識も持ち合わせていない自分がお産の方法などを知る由もなく、今さらながら自分が何をすればよいのかと、頭が真っ白になったりした。

看護婦さんいわく、汗を拭いてあげたり、お水を飲ませたりしてあげなさいとのこと、みんなが慌ただしく動き回る緊張した雰囲気の中、水差しの水をこぼしたり、恐る恐るガーゼで彼女の顔の汗を拭こうとすると、当然こちらに気を遣う余裕のない彼女からは「もつとちゃんと拭いて！」なんて怒鳴られたり。また

もや逃げ出したい思いに駆られながらも、いきるときには一緒に手を握り、なんとか励ましの声をかけながら、最後の力を振り絞っている彼女のそばにいた。

「もう少しだよ。」必死さのあまり、まるでこっちの声が耳に届いていないかのような彼女だったけれど、自分の声に小さく頷いてくれる。もう少しで赤ちゃんの頭が見える



## 治伸藤佐

ところまできた時点で彼女の体力の限界が見えるも、もう一踏ん張りで自力出産ができるとみんなの励ましを受け、七時四十分、無事女の子を出産。

二人の無事を確認したあとは、生まれたばかりの赤ちゃんの気管にたまった水を抜く様子を、喜びや安心とは少し違うような、感情がマヒした感じで見ていた。

先生に勧められてへその緒をはさみで切り、産湯で洗った赤ちゃんを最初に抱かせてもらう。あまりに小さくて頼りない命。ふいに、この子はこんなにちっぽけで弱々しくて本当に大丈夫なんだろうか？と不安になつてしまつたけれども、先生や看護婦さんの落ち着いた様子を見て、大丈夫なんだ、どうもこれが普通のようなだ、と変に納得したりした。

赤ちゃんはこのあと、新生児室で看護婦さんに見てもらい、体力を果たしたお母さんは病室で静養することに。大仕事を終えた彼女のそばにずっといてあげたかったけど、外せない仕事があり、二人に別れを告げて車で仕事に向かった。

その車の中でかかっていたCDからこんなフレーズが流れてきて、初めてゆっくりと父親の実感というか、少しづつ変わっていく自分を確信したように思えた。

「ゆっくりと、だけど確かに、おだやかに時間は過ぎる」

気付いたら、もうこんな所だなんて、ぼくなんか思ってしまう

寄せては返す波のように土曜日へと走る車の中」

（サニーデイ・サービス 『週末』）  
（続く……かも）  
（さとうしんじ）

# 地域社会の再生と地方自治(二)

## 地方分権時代に求められる発想の転換

根小田 渡

過疎と高齢化に悩む地方にとつて何よりも重要な課題は、《どのようにして地域社会を維持し再生させるのか》という問題であろう。

今日、地方が直面している困難に対しては、これまでの慣れたやり方（国全体の経済成長による富を地方に配分して社会的平等と安定を実現する）では対処することができなくなっている。というのは、単に国と地方の財政が破綻状況にあるというだけでなく、地域経済の活性化で、介護福祉であれ、環境問題であれ、問題そのものが国が号令をかけて画一的に解決できるようなものではなくなっているからである。もう「お上頼み」で「何とかなる」時代ではなくなっており、「霞が関からは知恵も金も出てこない」と考えた方がよいということなのである。

したがって、まずもって発想の転換＝頭の切り換えが必要であろう。中央依存・外部依存意識を払拭し、「自分たちのことは自分たちでやる」「自分たちの地域は自分たちで立て直す」、つまり自前で地域づくりを考えるというのである。その際、住民自身が望ましい暮らし方を設計するのが基本となるが、当然それは地域によって多様・多彩なものとなる。生活の質は単に貨幣価値で表わされる所得水準によっては計ることができないであろうし、人々の価値観や地域住民の暮らしが望ましい状態にあるかどうかの判断基準（「豊かさ」の基準）は多様化しているからである。

もとより、自前の地域づくりとはいつても、一朝一夕に成るような簡単なものではない。しかし、安易に

外部のコンサルタント企業に頼った地域開発プラン（テーマパークやリゾート施設等）の多くが挫折し、その尻拭いに苦慮している自治体の姿を見るにつけ、地味ではあっても、地域の人・資源・価値を見直した地域づくりを試みるのが大切だと思うのである。

地域のもつ文化、地域の産業がくり出す地域の個性とイメージが人を引きつけ、所得や雇用を伸ばす。そういう方向で地域経済と財政の地道な発展をめざす。そして、中・長期的には、地域経済の公共部門（役場・学校等）と公共土木建設事業への依存度を減らしていく。そういう自前の地域政策なしに、「自治」と

「自立」の基盤が形成されることはないであろう。

もちろん、地方分権の時代にそれぞれの地域が自前の地域づくりをめざすとはいっても、そのための基盤整備や国民としての最低限の生活保障（ナショナル・ミニマム）に対する国の責任が免除されるわけではない。国の役割・責任はそれとして明確にしなければならぬし、これについては自信と根拠をもった主張をすることが重要であろう。筆者は、さしあたり以下の四点について、地方から積極的に要望・提言していくべきだと考えている。

第一は、国家的・公益的見地からの農林水産業の潜在的生産基盤の維持と森林管理についての具体的提言。キーワードは「安全」（食の安全、食糧安全保障）と「環境」である。第二は、補助金整理・交付税縮小だけをつまみ食いするのではなく、地方への税源移譲を実行すること。第三は、地方自立のための基盤整備とナショナル・ミニマムを保障するための財政調整制度は必要であること。第四は、基礎自治体の自治権の保持を前提とした多様な自治体のあり方を認めることである。  
（ねおだわたる／高知大学人文学部 社会経済学科教授）



# 散歩の途中で



今から100年ほど前の明治30年(1897)3月、ここ農人町の岸壁からはるか北海道の原野に向けて、一団の移民が启航した。坂本直寛ら率いる北光社の移民団である。関門海峡を抜けて日本海を北上し、小樽、宗谷岬をまわって網走に到着した。彼らにとっては、心中、死をも覚悟しながらの船旅であったかもしれない。現在の北見市の発展に繋がる人々の物語の始まりの地である。

## 風伯

### プライバシーの侵害

情報は、「表現の自由」や「国民の知る権利」を阻害するものではないと思う。プライバシーを侵害しなければ成り立たない表現の自由や芸術性というものはあり得ないのではないか。プライバシーと「表現の自由」とは次元の違う話である。表現の自由の名のもとに言っている

小説『石に泳ぐ魚』の出版差し止めの最高裁の判断が下され、「表現の自由」と「プライバシーの侵害」とを対比させた論調が目立った。プライバシーを侵害された側の訴えに対して、訴えられた側が「表現の自由」で対抗しているだけで、プライバシー、つまり守られるべき個人情報

個人が「傷つけられた事実」だけを独り立てて裁くべきであらう。なぜなら、守るべき個人情報や救済する手段は裁判に訴える以外にないのだから。  
(竹落葉改め男郎花)

# 賛助会員募集

年会費2000円で  
どなたでも入会できます

ご入会いただくと……

「文化高知」を年6回  
お手元にお届けします。

事業団発行の書籍を  
10%割引いたします。  
(事業団で直接お求めの場合)



お申し込みは……  
事業団にお電話でどうぞ。  
次号に郵便振替の用紙を  
同封してお届けいたします。

## 今号の表紙

「シネシネさん」 ヨコタアキラ

もともとは作業の合間に走らせた落書きがベースとなったこの作品。適当なフォルムを適当な状態で保つよう、丁寧に作り上げました。

塗装は下書きをせずにボスカで一気に入!

(よこたあきら)

## 高知を撮る

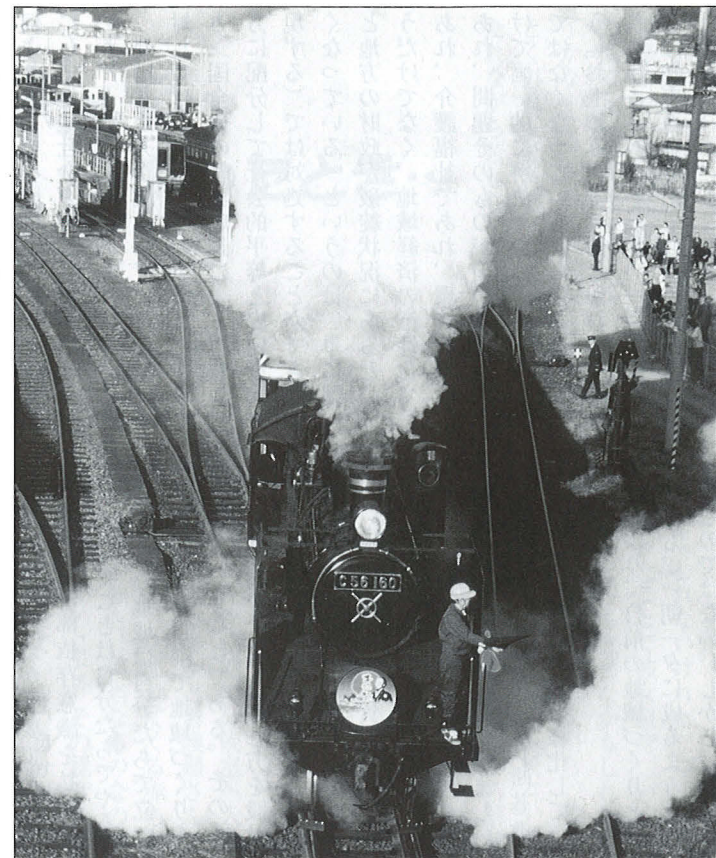
第18回写真コンテスト入賞作品

### 33年ぶりのSL復活

(平成13年 高知市)

柳瀬博文

33年ぶりに土佐路を走ることになったSLを記念に撮りました。高知駅にて。



ふるさとの山に向ひて  
言つことなし  
ふるさとの山はありがたきかな

(啄木)

啄木にとつての「ふるさとの山」は、高く聳える岩手山だったに違いない。でも、ひねもす遊んだ裏山に「ふるさとの山」を感じる人も多いと思う。最近、このような里山の持つ意味が見直され、条例などで保全の動きがあるのは、遅きに失したとは言え、嬉しいことである。

かつての里山は、市街地のすぐそばにありながら、今では想像でしかないくらい多様な生き物が暮らしていた。虫好きの少年たちにとっては、そこはまさに地上の楽園だった。

高知市の里山のうち、戦前から戦後しばらくの間、チョウウチヨウ好きの少年にとつて、とりわけ魅力的だったのは、小高坂山だった。早春のツマキチョウ、コツバメ、晩春のミカドアゲハに始まり、冬のイシガキチョウやムラサキツバメまで、この丘は、年間を通じて少年たちを飽きさせることにはなかった。この丘のウラコマ

## 里山

### 風俗歳時記



ダラシジミやホシミスジを探るために、わざわざ遠くからやってくる人もいたほどである。  
少年たちは、蝶を探るだけでなく、樹や花に四季を感じ、墓石の漢字を論じ、時には眼下の市街を眺めながら夢を語った。

彼らの中には昆虫研究者として大成した者もいるが、多くはチョウウチヨウとは無縁の生活をしている。しかし、進路にかかわらず、少年たちは里山で自然を感じる力や自然とのつきあい方を身につけることができた。つまり、里山は「総合学習」の場だったのである。「理科ばなれ」などという言葉もなかった。

我が国の「高度経済成長」にともない、この丘の蝶たちは次々と姿を消していった。そして今、丘ではそれに止めを刺すような「開発」が進められている。今の子どもたちが、将来、遠い異郷で思う「ふるさとの山」とはどんな山だろうか? 「ありがたい」と思うだろうか?

(路)





高知市文化プラザかるぽーと開館記念事業のお知らせ

文化高知 No.110  
2002年(平成14年)11月7日発行  
「隔月発行」

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780-8529 高知市九反田2番1号  
TEL(088)883-5011(代表)郵便振替0180015-14889

# 山村誠一と ドリームオーケストラ

「世界のクリスマスコンサート」



- 山村誠一  
(パーカッション)
- 押尾コータロー  
(ギター)
- 大町 剛  
(チェロ)

クリスマスは12月です。でも冬じゃない国もあります。オーストラリアやカリブに浮かぶ常夏の島国では、冬のクリスマスって、なんかヘン!って思っているかも。このコンサートはいろんな国のクリスマスを音楽で一周します。3人のストーリーテラーと一緒に、世界のクリスマスへ出かけませんか!



**2002.12.15 [日]** 開場 13:30  
開演 14:00  
高知市文化プラザ小ホール

全席自由：2,500円 (1,750円)

※( )内の料金は身障者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者とその介護者1名の料金で、高知市文化プラザでのみ販売します。

主催：高知市・(財)高知市文化振興事業団  
共催：高知市こども劇場

【前売り券販売所】

高知市文化プラザミュージアムショップ：088-883-5052  
高知新プレイガイド：088-825-4335  
高知大丸プレイガイド：088-825-2191  
高知県民文化ホール：088-824-5321  
高知県立美術館ミュージアムショップ：088-866-8118  
高知市こども劇場：088-883-8022

【通信販売】直接購入が出来ない方は通信販売をご利用下さい。必ずお電話(088-883-5073)にてご予約の後、郵便振替口座[加入者名：(財)高知市文化振興事業団 口座番号：01680-5-14869]に公演名を明記の上、チケットの合計金額と送料430円を合計した金額をご入金下さい。入金確認後、簡易書留にて発送いたします。

【公演に対するお問い合わせ】(財)高知市文化振興事業団企画事業課 088-883-5071